

# 労協連だより

甲子園の終了と共にすっかり暑さも和らいだ。1年の中で五感がもっとも過敏な秋の到来は、労協の活動も繁忙期に入ることを意味する。

秋の臨時国会に向け、協同労働法制定のヤマ場として位置づける「9.28市民大集会(千代田公会堂・1,000人規模)」が近づいてきた。法制化を巡る国会内の情勢は一進一退ではあるが、社会環境が協同労働法を必要とする機運は高まる一方だ。労協連の取り組みを大きく超え、国民的運動に高めていく時期とも言える。ILOの協同組合促進勧告は、もはや協同組合はメンバーのためのみに存在するのではなく、社会的財産として評価したといえるし、その根拠は、ディーセントワークを実現しうる労働・雇用の創出の担い手という点である。「ディーセントワーク」をキーワードとした法制化運動の新しい段階は、障害者やホームレスなどの運動との合流を早めようとしている。障害者の自立支援を実践した人々との出会いが急速に広がり、行政からホームレスの自立支援に関する事業の委託が舞い込んでくるのは、顕著な例である。その意味からも、9.28集会は、こうした段階を全面的に押し出すべく、企画・キャスティングに追い上げをかける日々である。ぜひ多くの方々の結集をお願いする次第である。

この秋のもう一つのビッグイベントは、隔年で15年続けてきた「協同集会」である。前回の東京集会から、「協同を問う」段

古村伸宏(日本労協連・事務局長)階を発展させ、「協同を拓く」集会へとバージョンアップした協同集会。今回は、ILO勧告や地域福祉・失業の危機克服をはじめとした、「協同組合の公共性、行政とのパートナーシップ」ということが大きなテーマである。そしてその背景にある大テーマは、こうした地域で「協同を拓く」時期に、食の安全・信頼や金融不安という課題をはじめとした「協同組合を問う」ということではないだろうか。こんな気負いで臨む今回の協同集会は、全国集会として福岡(11/9.10)・千葉(11/23.24)の2ヶ所開催という荒業への挑戦でもある。それぞれ県レベルでの協同組合・NPOと雇用創出を結ぼうとしている地である。新しい出会いと結集の創造が、新たな協同を生み、地域を拓く、そんな集会へと成長させるつもりで準備を進めている。

この秋の2大イベントを支える力は、我々自身の「仕事おこし」の実践であり、それを種とした「協同労働・協同経営」の確信と、「ネットワーク」の広がりである。幸い、地域福祉事業所を核とした新しい事業への挑戦は広がってきており、そこには働く組合員の主体性あふれる「知恵」が息づきはじめている。これこそ我々の力であり、これを正しく評価し、伝え広げることが労協連本部が負っている課題だ。一方で組合員の主体性を無視したり捻じ曲げ、新しい挑戦に背を向け保身に走る組織は、先進組織との格差をますます広げ、あきらめや居直りまでも生み出している。

この秋は、以前にも増して「歴史」に身を置くことへの躍動感と神々しさを実感することとなるだろう。歴史とは普遍性の鏡であり、私利私欲・奢りへの戒めとしなければならない。「私」のない人はいない。問題は、「私

ありて私なす」のか「私ありて協なす、協ありて私なす」のかの違いだ。本来「協」なく生まれ育つものはいない。その真理に気づく秋として、哲学的思考を育てるのが、私の課題だ。

## 研究所たより 研究所たより

8月11日に米国ワシントン州のウエスタンワシントン大学教授ロバートC. マーシャルさんが来日されました。今年12月までの予定で、神奈川高齢者生活協同組合で調査を行う予定だそうです。

マーシャルさんの専門は文化人類学で、日本のワーカーズコープを研究のテーマにしておられます。94年に来日し1年間滞在された時は、東京近郊のセンター事業団、エコテック、ワーカーズコレクティブなどいくつかの事業所に入り、実際にそこで共に働きながら調査をされています。ちなみにセンター事業団では東京・板橋の小豆沢病院の清掃現場で清掃の仕事をされていました。

当時お話をした時に「日本語の新聞が読める」ということを聞き大変驚きましたが、今回お会いしても日本語の会話や読むことに関しては、ほとんど不自由していないようでした。よい機会ですので、米国の事情や最近の研究の内容などもお聞きしたいと思います。なお、マーシャルさんは9月以降、川崎市麻生区の民間アパートに滞在されます。

協同集会の準備が少しずつですが進んでいます。なかなか決まらなかった記念講演が、ILO 駐日代表の堀内光子さんに決定しました。堀内さんは、2000年よりILOの駐日代表を勤められており、最近ではアフガンの復

興会議等にも参加されています。東京に来る以前はタイのバンコクでアジア地域の担当をされており、通貨危機の最前線で労働者の雇用を守る取り組みをされていたそうです。

今年の1月26日に行われた日本協同組合学会主催のILO新勧告のシンポジウムの時に初めて親しくお話をさせていただく機会を得、その後ILO総会の協同組合促進勧告の討議等を通じて、拡大するインフォーマル労働をディーセント・ワーク(適正な労働)に変えてゆくためには、労働者協同組合をもっと支援・発展させることが重要である堀内さんは明快に考えておられます。

日本の労働者協同組合運動の歴史や背景なども独自に勉強されているようで、労協連の活動にも大きな期待を寄せていただいています。協同集会には、記念講演だけでなくぜひ2日間とも参加させて欲しいという嬉しい申し出もいただきました。失業問題、特にホームレスの自立支援などの話や、アジアの地域開発やNPOの活動の見学ツアーをやりましょう、という話など様々に話は盛り上がっています。

今後、協同集会に限らず協同総研としてもインフォーマル・セクターの研究等でILOや堀内さんと様々な形で「協同」を続けていきたいと考えています。(菊地 謙)